

を有する事から卵巣類皮嚢胞腫を疑った。手術により、卵管の茎捻転を伴った右卵巣類皮嚢胞腫が証明された。本例のように脂肪成分が CT 上認められない症例が、当科の統計では 113 例中 4 例 (3%) に存在する。類皮嚢胞腫の CT では脂肪成分の存在が診断のポイントとなるが、その存在が認められなくても否定できないと思われる。

5) 開口障害を来たした下顎骨の両側性筋突起肥厚

中山 均・佐々木富貴子 (新潟大学歯科)
中村 太保・伊藤 寿介 (放射線科)

最近、私達は開口障害を示した下顎骨の両側性筋突起肥厚の症例を 3 例経験したので報告する。

症例は 20 才～24 才の男子で、いずれも全身的には顕著な所見・既往歴などなく、初診時の開口度は 14mm～20mm と、明らかな開口障害を示していた。これらの症例の単純 X 線写真と CT 写真像を、正常像と比較して検討した。

その結果、いずれも、両側性に、(1) 正常より肥厚した筋突起があり、これが頬骨弓の上方面まで伸び、(2) 開口時、わずかな軟組織を介して頬骨弓と衝突して開口が障害され、(3) そしゃく筋群の廃用萎縮などが見られた。

文献などの報告によれば、この疾患は非常にまれなものと言われている。しかし、わずか 4 ヶ月の間にこれらの 3 例に遭遇したことを考えると、言われているほどまれなものではなく、歯科を訪れなかったり、原因不明の開口障害として処理されたりするケースがあるのでは、と考えている。

6) 頭頸部進行癌に対する照射前化学療法

末山 博男・尾崎 正時 (琉球大学)
諸見里秀和・中野 政雄 (放射線科)

7) 遠隔転移のみられる進行食道癌に対する induction chemotherapy の経験

末山 博男・尾崎 正時 (琉球大学)
諸見里秀和・中野 政雄 (放射線科)

8) 上顎洞真菌症の 2 例

清野 泰之・岡本浩一郎 (荘内病院)
梅津 尚男

最近経験した上顎洞真菌症 2 例についてその画像上の特徴を CT を主体に検討した。病理学的には 2 例中 1 例はアスペルギルス症であり、もう 1 例は不明であった。CT 上は両者とも片側性上顎洞内軟部組織影と軟部組織

影内石灰化をみとめた。何れも副鼻腔アスペルギルス症の特徴とされており、不明例においても、アスペルギルスによるものであることが推測された。又他に激症型副鼻腔アスペルギルス症についても文献上の考察を加えた。

9) High-dose delayed CT により病変の確認された延髄背外側症候群の 1 例

登木口 進 (小千谷総合病院) 神経内科
倉島 昭彦・土屋 俊明 (新潟大学歯科) 放射線科
伊藤 寿介

下部脳幹病変は CT 上捉える事が一般に困難であり、延髄梗塞も一般には容易に描出されないとされている。当科では今までに 5 例の延髄外側症候群 (Wallenberg 症候群) を経験しているが CT で梗塞巣と思われる所見は 1 例にしか捉えられていない。今回、延髄梗塞により延髄背外側症候群 (小脳交感神経症候群) を呈した 1 例において CT を行ったが、単純 CT では梗塞巣は捉えられなかった。しかし発病 13 日目に high-dose delayed CT を行った所、左延髄背外側に enhancing lesion が検出された。1 カ月半後には既に検出されなくなっていた。今後 high-dose delayed CT を用いれば、延髄梗塞巣も検出率が増すと思われる。同様の報告は現在、文献上見あたらない。

10) CT 上脳神経浸潤をきたした上顎洞癌

佐々木富貴子・中山 均 (新潟大学歯科)
中村 太保・伊藤 寿介 (放射線科)

本症例は上顎洞癌が翼口蓋窩から頭蓋内へと神経走行に沿って伸展していったと思われた症例である。

初診時、すでに腫瘍は翼口蓋窩に及んでいた。9 カ月後の CT で cavernous sinus の膨隆がみられ、骨条件で卵円孔の明らかな拡大、骨破壊がみられ、腫瘍は卵円孔を通り cavernous sinus に至ったと思われる所見であった。2 カ月後、腫瘍は cavernous sinus から三叉神経根部を通り後頭蓋窩に浸潤し、その後、腫瘍は神経に沿う様に伸びてゆき pons に接し、さらには pons の一部が造影され pons に浸潤したと考えられる所見を示したものである。

上顎洞癌が頭蓋内へ伸展する症例はめずらしいものではないが、本症例は神経の走行に沿って腫瘍が少しずつ伸展してゆく過程を CT を通し、目で追うことができたと思われた症例であったので報告した。